

随想

燃えない症候群

～ 最近の若者には夢がない？ ～

加藤 宏光

以前も触れたが、最近の若者には夢がないと言われることが多い。著者も一五年程前まではそう考えてもいた。しかし、近頃は「本当にそうだろうか？」と思うことが多い。

著者の研究所にフィリピン大
学からの留学生がきている。博士号のタイトルをとるために昨年十一月の末に来日した。彼は非常に優秀でかつ夢いっぱい日本へきた。しかし、成田空港へ迎えに行くと福島県のラポへ着くまでに話してくれたストーリーには、学位をとってからの具体的な夢は含まれていなかった。というより、なにをしたら夢が描けるのかは実感していな

いという方が当たっているだろう。貧しい家庭で育ち「豊かになりたい」とひたすら願う彼の夢は日本人のように豊かに暮らしたい、というものであった。

著者は昭和十八年（一九四三年）生まれで故池田勇人元総理大臣の掲げた《所得倍増》を追いかけた世代である。

大学時代には自家用車は夢物語であり、オートバイを駆って青春を謳歌したものであった。それから数年して社会人となった後、東京で開催された獣医学会の折りに先輩に奢って頂いたピザの味に驚いた（それがピザという食い物であること自体を知らなかった）。もちろん、当

時からこうした文化を当たり前のものとしていた層があったことは十分に理解できる。しかし、その時驚いた味は今思い起こせば本物と言いい難い脂っこいものであった。

著者の最初に奉職した場所は養鶏産業に門戸を開く公立の研究所で、研究所の車で近畿一円の生産農場へ病性鑑定に出かけた。その車にはエアコン（当時はカークーラーと呼んだ）等なため、夏には窓を全開にしても暑くて堪らなかった。たまさか、大規模採卵養鶏場オーナーの自家用車に便乗した時にエアコンの威力に羨望の思いを募らせたものであった。

その時代の夢は
《良い車に乗りたい》
《美味しいものを食べたい》
《家を持ちたい。それも洋風の近代的な…》
《海外旅行をしたい》

《ヨーロッパやアメリカ映画で見た憧れの街を直に見てみたい》

当時はこうした具体的・即物的な夢を持っている若者がほとんどで、社会奉仕や自己犠牲をいとわぬNPOの国際奉仕を人生の夢とする人はさほど多いものではなかったように覚えている（国際協力事業団-JICA-を介して国際活動をしている若者がいたことは事実である）。

翻って今日を見てみよう。自動車は生活の必需品となっている。必要条件を満たす車というだけなら、一〇万円台でも手に入る。リーズナブルな品質の中古品でも一〇〇万円も支払えばエアコンもオーディオも、時にはカーナビまで付いた、十分に満足できるものがある。

著者の中学校時代に観たアサヒグラフという写真雑誌(現在は廃刊)にアメリカで山積みされていた廃車の山が特集されていた。憧れの的である自動車が山積みにして捨ててあるという景色はまだ子どもであった著者にとって一種のカルチャーショックであった。

その光景と同じ廃車の山が今日の日本では当たり前の景色として散在している。そして、フィリピンからの留学生(大学職員であるから、彼らはエリートである)はこの自動車を「持って帰りたい」という。彼らにとって憧れのモノは現在の日本の若い世代にとっては、そここにある当たり前の《粗大ゴミ》か

もしれない。

美味しいものもそれなりの値段でそれなりの食べ物が楽しめる。銀座に「つばめグリル(銀座コアビル内)」という美味しいハンバーグ専門店がある。確かに美味しいがこの味に近いハンバーグがファミリレストランでも食べられる。味の要諦となるチーズが容易に使える環境によるものであろう。ハワイへ四〇五日のバケーションを計画して必要になる予算はシーズンでも一四〇一七万円、オフシーズンであればその半額という格安も見つけられる。航空運賃と宿泊に二食が付いているセットである。ヨーロッパ旅行でも似たようなセット価格がある。こうしたシステムを利用すれば映画にみられるシーンを肌で感じることは難しくもない。当時大都会でなければ経験できなかったファッションも著者のラボのある福島県の中核都市の若者と下北沢や原宿の間に大きな差を感じないほど日本全体で均質化している。

つまり、われわれ世代が若いころ遠い夢として憧れ見た生活が、手を伸ばせばすぐに届くところにあるのである。贅沢を言えば限らない。ビートたけし(映画監督北野武)は三台のロールスロイスを所有し、六、〇〇〇万円のカルティエの時計を腕にするそうである。このような贅沢は別として、多くの日本人が当たり前のように行っている生活は世界基準で言えば贅沢の極みであろう。

そうした中で将来に持つ夢はどんなものであれば、われわれ年寄り世代は満足するのであるうか!?

「近頃の若者はハングリー精神に欠ける」というのはつい著者も指摘したくなるポイントである。しかし考えてみればハングリー精神は飢えているから表に表現されるものである。ハングリーでない(平均的に満足している)人にハングリー精神を求めるのはいささか筋違いなのではないだろうか?

先日読んだ書物に次のような指摘があった。

《今頃の若者は…と苦情を述べる中高年世代はわが国の高度成長期の恩恵をともに受けてきた世代である。人は足りない、給料は倍々に伸びる。週休は二日になる。忙しい忙しいと言いつつながら感謝の交際費は使いたい放題。こうした時代背景で生きてきて、年金は決まったこととして受け取る。こうした世代は、現在の若者が置かれた「幸福な年寄りを支えることにきゅうきゅうとしている」といった境遇を実感することもなく、現代の若者世代に不平を並べている。では、良き時代を享受した古き世代が今日の若者世代と対比して本当によくやってきたのだろうか?》

こういう論調が生まれ始めたことは、無批判に現代若者を非難することに慣れた世論を反省するに重要な感性ではないだろうか!!